



里見淳
久保田万太郎集

日本文学全集 23



筑摩書房

日本文学全集 23 里見 久保田万太郎 集

昭和四十五年十一月一日発行

著 者 里見 淳
久保田万太郎

発行者 竹之内静雄

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九一七六五一（代表）
振替東京四一二三

本文整版 株式会社精興社
本文印刷 多田印刷株式会社
製本 株式会社鈴木製本所

里見 惇集 目次

汐風

五

善心悪心

三

妻を買ふ経験

九

三人の弟子

二三

かね

二三

椿

二五

火蛾（ひとりむし）

二六

彼岸花

二八

久保田万太郎集 目次

春泥

一〇三

末 枯（うらがれ）

二七

続末枯

三六

市井人

三三

三の酉

三五

大寺学校

三七

年 譜

四二

人と文学

佐伯 彰一 四九

口絵写真提供（里見淳）

毎日新聞社

〃 〃 撮影（久保田万太郎）

後藤重弘

里見
淳
集

肉體の修養

五 是 序

長身瘦形、柔く鶴に譬へられ在る川龍之分
 云く随舞に「儒儒の言葉」と題する一篇があ
 る。もしより「小生」按者」といわかぬき度
 因風り舞踊、身なり格好で、軽い戯れに、又
 つかう「一寸法師」と名乗つておけの紙、別

潮 風

一

周りぐく短く、上だけ長目にした田舎臭い散髪の、少しくらは白粉を塗つてゐはしまいかと思はれるほど、柄にない色白の若者が、あらう格子縞のゆかたに角帯、白足袋の草履ばきで、大きく跨を割り、出尻に構へた腰で調子をとりに、肉切庖丁のやうな、洋銀鍍金でピカピカ光る両刃のナイフを手玉にとつてゐる……。

「……ハ、淀の川瀬は水車。……お次は、ナイフはよん挺、手は二本、尤も三本あれア片輪でけすが。……いよく四挺の乱どり、巴は波の紋！ ハ、シツカリ！」
紅い手拭の頬被がよく似あふ因果な顔つきの道化師は、並んで立つて、碌すっぽ太夫の方は見もしずに、扇の要で隣を指して、口上を言ふ。三味線弾きの年増をいれて、お囃が四人。……調子が早間になつて、横太鼓が、胸と腹との境あたりへ、櫟つたく響いて来る……。

邪念の多さうな、バラ／＼と面頬のふき出た太夫も、全

く無我の境にはいつて見えた。目をよせて、ちつと一点を見詰めてゐる。テリン／＼と、柄を握られるたびに刃が鳴つて、鳴つたと思ふと、綾に、筋かひに、まるで糝粉細工かなんかで、ヘナ／＼撓ひでもするやうに、キリ／＼と空へ舞ひあがる。……午まへのことで、西へ向いた玄關さきの広場には、ぢかの陽こそあたつてゐないが、真ッ青な、八月の天空へ、まばゆいほどにきらめきながら舞ひあがり、舞ひくだる……。

直衛は、さつきから、いかに商売とは言ひながら、日に何遍となくあんな思ひをするんではやりきれない、と思ひながら、凄いほど一心になつてゐる若者の目つきで、なんとなくいやな気持ちにされてゐた。で、

「行かうか」

と、砂の上にぢかに出してある籐椅子に腰かけてゐる悦三の肩を叩いたが、然しヤツぱり、そのまゝ不愉快な見物から目を離せなかつた。

「うん」

曖昧に答へて、友達もちつと見入つてゐた。

まだ海へ出かけたものはさうたんとなくなかつた。誰がやらせたのか、太鼓の音で、午食ちつと前の半端な時間を退屈してゐた宿屋ぢゆうの人たちは、――坊ちゃんお嬢ちゃんはもとより、旦那様も、奥さんも、御隠居も、それから直衛や悦三のやうな学生連も、殆ど一人残らず玄關前の広場へ出て来てゐた。襟に宿の名を染め出した半纏に、半腿

引で、岡持を肩にかけた男や、台所で働く女たちは、うしろの方から、小松の間に立つて見てゐた。そつちは、暑さうな陽が、砂に白く、チカ／＼と耀いてゐる。

「こん畜生！ またこの女は……」

突然、大勢のなかでいくらか遠慮して抑へた声ではあつたが、悦三が、笑ひを含みながらも怒鳴りつけるやうな調子でさう言ふと、ひよいと直衛の鼻のさきに突ッ立つた。それと同時に、藤椅子が吊るしあがつた。見ると、悦三の兵児帯が、椅子のうしろに結びつけてある……。

バタ／＼バタ、と廊下を逃げて行くうしろ姿は、お種だつた。

「オイ、解いてくれよ。あの婆ア、ほんとに為様のねえやつだ」

何事が起つたかと、あたりの人々が振り返つた視線の一斉射撃を浴びては、自分ではひとかど悪党がつてはゐるが、今年大学に移つたばかりといふ年ごろの悦三は、さすがに赤くなつて、藤椅子をぶらさげた尻を直衛の前に突きつけた。

「オイ、早く解いてくれッたら」

と、もちまへの早口で急ツついた。

振り返りながら、友達の顔さへまともに見ることが出来ないまでに、やり場に困つてゐる目つきに気がついて、（やア、すつかりあがつてやアがあるな、いゝ気味だ！）と思ふくらゐの余裕ある氣持も、一方には保つてゐながら、

直衛は衆目的になつてゐる男にかゝりあつて、まきぎひで、自分までこの馬鹿げた見物に端役を勤めなければならぬことで、他愛もなくあツとなつて了つた。——世界中のお嬢さんの見る前で赤恥をさらしたやうな氣持は、殆ど腹立たしいほどのものだつた……。

ツキン／＼鳴りさうに、頬に血がのぼつてくるのを感じて、必要以上にこゝろで、——悦三と藤椅子とのかげに隠れるやうにして、手早く帯の結び目をとくと、直衛はそのまゝ玄關からあがつて、さつさと部屋の方へ歸つて行つて了つた。「おい、なんだい、海に行かないのか」と呼びかける友達の言葉も聞きすてにして……。

二

……急に空が暗くなつた。平潤な砂浜と、海の上に広がつた蒼穹のもとでさへ、午後の三時ごろが、殆ど冬の日暮のやうな暗さになつて来た。いつの間にか箱根の山々が暗雲に覆ひ尽されてゐた。それで、常に見馴れた景色が、初めて来たところのやうに変つて見えた。変つたといへば、海の色がインキのやうに黒み亘つて、砕けかゝる波がしばらくが、まるで光を放つかと思はれるほど白かつた。江ノ島の輪郭は、薄墨で描かれたやうに空へにじみ出してゐた。そこから大百足が匍ひ出したとも見える栈橋で、片瀬へとつながつた浜には、豆でも撒いたやうに、白い運動着の学生が、ベースボールかなにかやつてゐる。

風が死んで、あたりは不気味なほど静かだつた。懶い波の音のあひまには、ごく幽な遠雷が鳴つてゐた。……永いこと二人は黙つてゐた。

「そろ／＼行かうかね」

と、悦三が言つた。柔いやうで、砂は、尻の下に堅かつた。脛を抱いてゐた手をほどくと、さう誘つて置きながら、片肘ついて、体を横にした。今にもボツリ／＼と大粒のが来さうな空模様、漁師らしい人影さへなく、彼等ばかりが広い砂浜にとり残されてゐた。……直衛は返事をしなかつた。

「綺麗だなア、おい、ちよいと見ろよ」

また暫くしてから悦三が言つた。手にさはつた浜草を、なんとなくちぎつたのに、しみ／＼と眺め入つてゐた。それはたゞ、つまらない、防風の葉だつた。粉雨のやうに降つてゐる、ありともしない仄かな光に、緑が、不思議なあざやかさで目にしみるのだつた。

「うん、綺麗だ」

片膝立てた上に顎をのせて、遠く水平線を見入つてゐた直衛も、振り向いて、同感した。

「そんな、上の空でなく、もつとよく見てみろよ」

悦三が得難い品でもあるやうに、そつと掌の平にのせた防風の葉をさし出した。

「だから、綺麗だよ。There's no doubt about it」

「まア、そんなことを言はずに、手にとつてみろよ」

「いゝよ、よくわかつたよ」

直衛は大きな八重歯をみせて、ニヤ／＼笑ひだした。

「何を笑ふんだい」

と、悦三もつり込まれて微笑みながら言つた。

五日ばかり前に、二人でこの鵠沼へ来る汽車のなかで、彼等の間では、復か、といふほどの性慾論が出た。恰度、騎士の称を受ける式に、剣で峰打ちを喰はす、そのプロといふ言葉を覚えてた悦三が、性慾教育といふやつも、中学卒業かそこの年ごろで、強制的にプロにするに限ると説いた。さもないと、みんなあんまり誇張して考へすぎる。まるで人生の一大事のやうに考へる。また無上の快樂と買ひ被る。そのために自慰だのなんだのといふ悪習が起る。早くプロして下へば、なアんだ、と思ふことに、いつまでも拘泥つて、あたう青春のエネルギーを消耗してゐるのだ。實際、それだけ苦しむ値打のあることならいゝが、みんな不必要な煩悶をしてゐるのだからくだらない。俺が他日文部大臣になつたら、小学校からそろ／＼性慾教育をほどこして置いて、中学の卒業試験と同時に、一人残らずプロを授ける。——などと、盛にそのプロといふ言葉を濫用して、ひとりよがりの怪氣焰をあげた。それくらゐだから、言ふまでもなく、悦三は、彼の謂ふところの峰打ち式をうけてゐた。——半年ばかり前に、吉原かどこかでうけてゐた。彼の dub 制度から言へば、それでも三年ばかり余計に「不必要な煩悶」をして来たわけだが、その説に

相応の敬意を払ひながらも、それでは何か世の中が味気なくなつて了ふやうな気持で聞いてゐた直衛の方は、もちろん清浄無垢な青年だつた。

そんな話から、而も結局は、「騎士」の身の有難さを聞かされたのだが、さまざまな功德のなかの一つに、ものを見る目が明かになる、*point* をうけないものには、本当の美はわからない、と云ふ一条があつた。……珍しくもない防風の葉を、無理におしつけに美しがらせようとする友達の言葉の裏に、直衛は、性慾教育の「騎士」である彼と自分との間に、比較研究の実証を握らうとしてゐるやうな相手の氣持を感じて、可笑しくなつたのだ。

「とても、君のやうには綺麗に見えつこないよ」

「なぜさ」

案外悦三も無邪氣で、解せない顔つきだつた。

「だつてさ、何しろこつちは *point* 前だからね」

「フン」

と、少しでもながらも、鼻のさきで笑つて「*pre-dubist* の目、かな。それとも、浜草の緑と *pre-dubist* か。ちよいとした新体詩の題だな」

この九月から、制服の襟に *L* の字をつけようといふ悦三は、そんな風に戯れた。

箱根の山を隠した陰雲を貫いて、淡紫の光がチラ／＼ツ、チラ／＼ツと二度ほど流れた。やゝ近い雷が続いて鳴り出した。

「もうじき、ざアツと来るぜ」

「行かうね」

「行かう」

二人は尻の砂を払つて立ちあがつた。波打際の砂が黒く湿つてゐる方へ来ると、いきなり浜全体が揺れだしたやうな氣持がするほど、一面に弁慶蟹が出てゐた。毎年の海水浴に、浜には馴染の深い彼等だつたが、あまりの数に思はず立ち止つて了つた。見ると、その何千と云ふ蟹が、一匹残らず同じ動作を繰り返してゐるのだ。前の二本足で砂を擁へ込むやうにし、うしろの二本足で穴を匍ひ出して来るのだが、出口へ頭だけ出して、目を高くさしあげ、外敵の有無を窺ふやうに見える。いゝとなると、五六歩、チョコチョコと足早に出て、砂を投げ捨てると、まるで大砲が発射した反動であとへさがるやうに、穴の口まで飛び退くが、そこでもう一度そとを眺めてから消える。例へば、護謨の紐で穴のなかに繋がれてゐるものが、何かの力で引きずり出されて、或る極度の延長まで来ると、バチンとはじけ返るやうな、忙しげな動作で、浜一面ざわめき立ちながら、それで、雷のあひまには、松籟ほどの幽かな音が、地の上を低く匍つてゐるばかりだつた。それはあたりまへのことで、なんとなく不氣味だつた。

ヤツと声をかけると、いきなり悦三が氣違ひのやうに駆け出した。メチャ／＼に蟹の群を蹂躪するつもりなのだが、直衛が見てゐると、恰度化学の実験で、一滴の液で忽ち液

体の色が消えて行くやうに、浜一面の動揺が、見るまにすうツとひいて了つた。と、遠くの方で、悦三が、憑かれた人のやうに、一つのところで高足を踏んで踊り狂ひだした。逃げおくれた一匹を両足の間に囲んで、行かうとする方を踏みつけ、どつちへもひと足も踏み出せないやうにして面白がつてゐるのらしかつた。

やがて、息を切らして悦三が戻つて来た時に、直衛が笑ひながら言つた。

「どうしたい」

「蟹のやつ、すつかり over-the-hell! されちまつて、いかんとも、為すところを知らない有様だつたね」

「フン、貴様も存外子供だな」

「そこが可愛いとさ」

「馬鹿！」

却つて直衛の方が、だいぶもう海水浴の客らしく染つて来た頬を、一層赤くして、そつぽを向いて了つた。

三

夏の、永い薄暮が来た。昼間烈しい陽に干したほとぼりが、さめ切らないやうに、ポツポとするだるい体を、縁さきに運んで、食後の水蜜桃を食べてゐた。甘い、ゆがたれるのを、顎をつきだして、庭へこぼすやうにしながら、遠くの四阿を横目で見やつて、悦三が言つた。

「貴様が日記になんか書いてたのは、右のはじにゐるやつ

だらう」

直衛もちよいと目をやつたが、頬張れるだけ頬張つた口をもぐ／＼させ、濡れた手の滴を庭へ向けて切りながら、立ちあがると、

「ちよつと待てよ、いま手を洗つて来るからな」

さう言つて廊下^{ろく}に上靴を鳴らして行つて了つた。

ポオン／＼と、護謨鞆^{ゴモタン}を打つラケットの音が響いてゐた。

「スリー、ワン！」

「いゝとも、スリー、ワンはジュウスの基だ。さア来い」

「サアブで取るかな」

「何がそんなへ、なちよ、サアブ、平氣の平ちやんだ」

庭の芝生で、直衛たちよりまた三つ四つ若いくらゐの学生たちが、テニスをやつてゐたが、四阿^{うちや}にゐるお嬢さんたちの見てゐる前だといふ意識で、ひどく燥^{あせ}いだ調子になつてゐた。——それがあんまり露骨だつた。

「どうだ、はいつたらう！」

「フォルト！」

「嘘つけ！ インサイだよ」

「チエー、冗談^{じんだん}いつちやあいけないぜ、フォルトだとも。ねえ、君」

「あたりまへさ。フォルトもフォルトも、大フォルトだ」と、組同士が言ひ張つた。

「そんなら、いゝよ」

「そんならなんて……」

と言ひかけた時に、恰度手ちやうどを洗つて来た直衛が、縁さきに立つて眺めてゐるのに氣がついて、

「ねえ、今の全くフォルトでしたね」

テニスでは、学習院で一二といふ腕前の直衛は、こゝで、その年下の連中の仲間にはいつて一二度やるうちに、いつか師範役らしい扱ひをうけるやうになつてゐた。

「見てゐなかつた。僕、今こゝに来たばかりなんだから」

「庄司さん、貴方はいりませんか」

「さうだな。今日はくたびれちまつたから、まアよしませう」

さう言ひながら、直衛は縁側にぢかに坐ると、低聲になつて、笑ひながら友達に、

「その実、やりたいのは山々なんだがね」

「ぢやア、やつて来いよ。どうせ尺八の稽古なんぞして、琴を弾くお嬢さんを物色してゐるやうな精神ぢやアないか」

「馬鹿いふない」

と、すぐもう赤くなりながら「俺は、あいつらみたいに、さも見貰ひたさうにやるのはいやだ。冷淡と思はれるくらゐに、ちつとも女にのろくないところを買つてくれるやうな女でなくつちアいやだ。あいつらみたいな、へんなwoolingは出来ないよ。そこへ行つちやア、毅然きぜんたるもんや」

「つまりキゼンタル・ウーイングだよ、貴様のは」

それで二人は、一度に笑ひこけた。食後の横ツ腹が痛く

なるほど笑つた。

その時テニスコートの彼方側むかひがはの徑を、お嬢さんたちが、海岸の方へ出て行つた。

「おい、きつと自分たちのことを笑はれたと思つたんだぜ。悪いや、ほんとに悪かつたなア」

直衛は、内心、實際悪かつたと思ひながらも、わざとやや冗談めかして言つた。

「大丈夫さ。笑はうと慍おこらうと、どだい彼方むかひぢやア眼中に置いてアしないよ、心配するだけ自惚うぬぼてらア」

「なに、そんなもんでなからうぜ。こつちばかりでこんなに思つてるんぢやアつまらない」

「おや、貴様、そんなに思つてゐるのか」

「いゝえさ、Eatonenを見ると、俺たちは、まア、なんとかかと思ふだらう？ 目が綺麗だとか、鼻がどうだとか、——口に出す出さないは別として、兎に角、すぐ問題にはしてゐらアね」

「さう。直公なんぞ、まるでそれが商売みたいなものだ」

「よせよ！……彼方だつて、さういふ氣持は、きつと俺たちとおんなじだと思ふんだ」

「さうかなア、この頃のお嬢さんたちは、みんな利口になつてゐるから……」

「爺ぢやいみたいなのを利くなよ」

「だつて、さうだよ……利口になつてゐるから、俺たちみた

いな若いものに惚れたつて、どつちみち夫婦になれるもんぢやないつてことを、ちやんと心得てるさ。だから、俺ア、女学生は嫌ひだつて言ふんだ」

「なアに、それこそ買ひ被つてるんだ。そいだけ常識が寤達してゐれア大したもんだが……」

「うん、成程それア、案外さうかも知れないが……」

「さうだとも、案外無邪気なもんだよ、きつと」

「そのへんのところは、大勢妹をもつてる貴様の方が *more* *thority* だ。……ぢやア、まア、彼方でも、負けずにこつちを問題にしてゐるとして、一体貴様は、どれを問題の中心に置いてゐるんだい。さつき右のはじにゐた、あれだらう？」

「どうも、さうわからなくちやア困るなア」

「さうか？ 違ふか？……だけど、なぜ俺がさう言つたかわかるか」

「わからない」

「あいつなら、どつか『彼女』に似てゐるもの」

「彼女つて誰だい」

「貴様の日記に、彼女々々つてしよつちゆう出て来るぢやアないか」

「だから、それが、どの彼女だよ」

二人はまた笑ひだした。實際直衛の日記には、たゞ一度往来ですれ違つたやうな女でさへも、まるで恋人のやうに書かれてゐることが、さして珍しくはなかつた。そのなか

で『彼女』と呼ばれてゐるやうな女は、幾人とも数が知れないくらゐだつた。

「月見草だよ」

直衛はバツと赤くなつて、

「なんだ、ちつとも似てゐやアしない」

日記のなかで「月見草」と呼ばれてゐる『彼女』は、目に通ふ山の手電車のなかでよく一緒になつた女学生だ。色の白い、丸顔の、小柄な少女で、悦三などの目には、てんで女としては映らないほどに、初々しさを通り越して、まるで情のない品物だつたけれど、直衛にとつては、この娘に会ふ会はないが、一日ちゆうの氣持をすつかり変へて了ふほどの力で働いてゐる、生きた女だつた。

「相近うして遂に相触ることなきは二条の軌道也。君と共に運命に駕してこの軌道の上を走ること数ヶ月、而も面接する機なし、また宜なりとや云はん」

など書いたこともある少女のことが、急に思ひ出された。これから、目白の学校へ通はなくなつて了へば、もう一生会ふことがあるかどうかもわからない人だつた……。

「散歩に出かけるかな」

悦三が言ひ出して、やがて二人は、縁さきからすぐに庭へおりたが、なんといふこともなしに、足が四阿の方へ向いた。その縁台に並んで腰かけてからも、暫くぼんやりしてゐた。

「おい、ちよつとこれ見ろよ」

さう言つて悦三が、麻裏の爪先で、湿つた砂の上を指してゐた。そこには、護謨裏の草履の跡が、くつきりと、いくつに残つてゐた。

「フン」

直衛は鼻で笑つた。悦三は立つて、同じ方へ向いた草履の跡の上に、自分の足を置いてみた、遠いのや近いのと、いろ／＼置かかへてみた。――まるで女の歩幅でも計らうとするやうに……。と、急に、チエと舌を打つと、乱暴にそこらぢゆうの砂を踏みくちやにして、一つ残らず護謨草履の跡を消して了つた。

「さア、これでいゝ。行かう」

「何がこれでいゝだい。一体貴様は少し変だね。年ぢゆう、なんだか苛々してゐるぢやアないか」

「苛々もしようさ。こゝに来てからもう幾日になると思ふんだい。一週間……。馬鹿にしてやがる。お嬢さんがなんでえ！」

池のそばを通りかゝつた。睡蓮の赤や白の花が、罌粟の形につぼんで、夕闇に紛れて、静かな眠りに就かうとしてゐた。直衛はちよつと足をとめて眺めた。

「なんだ、そんな sentimental な花！ どこがいゝんだ。……俺アもう東京へ帰らうかしら」

「貴様ツて人間は、實際、ものごとに満足といふ氣持がもてないやつなんだね」

と、直衛は呆れたやうに、相手の顔を見ながら言つた。

「俺なんか、毎日てきめんに肉はついて来るし、食ひものだつて、まア／＼あれで、我慢できるし、『經濟』も、来てから、氣の向いた時だけで五十頁読んだんだから、大勉強だし、Hadden は見放題だし、こんな結構な身の上はないくらゐに思つてゐるんだ。……この花だつて、たゞ漫然と見てゐる分にやア綺麗なものだぜ。sentimental だのなんだのつて、わざ／＼批評だか解釈だかをつけて、ひとりで悩んでたつて為様がないぢやアないか。俺なんか、貴様にでも教はらなけれア、睡蓮が sentimental だなんてことは、一生涯知らずにすましちまふところだつたんだ」

「俺に言はせれア、貴様はまたへんな悟りをひらいてて、まるで爺みたいだよ」

「うん、それアさうだ」

「それ／＼、さう、いやに軽く受けて、すぐ承認しちまふのがいけないんだ」

「いけないつたつて為方がないよ。それアね、貴様がなかなかものに飽き足らないで、しよつちゆうがつ／＼してゐる氣持は、積極的で大いにいゝと思ふよ。その方が俺たちの年齢として本統だとも思ふよ。偉い人が、運命に対して、齒をむき出したやうなやり方で押し通したのを考へると、ちよいと貴様が羨しくもなるよ、だけど、そんなこたア俺の柄にないんだ。いや、さうぢやない、生れつきの性分にやア、わりにさういふところもないわけやアないんだがね、何しろ俺は輕燥な性分だから……」

「それさ、すぐさう乾燥だなんて、平気で自分を否定しまふのがへんだよ」

「へんかも知れないが、子供の時から、俺は乾燥でいかん、としみじくさう思ひ込んで来たんだから、今更どうも為様がないぢやアないか。こんな性分で、悪く図に乗つて、運命に反抗しようの、ものごとに飽き足りようのつていふやうな非望を起したひにやア大間違ひだ、為にならない、と、ちやんともう覚悟してゐるんだから駄目だよ。いくら貴様がおだてたつて無駄だよ。俺はどんな現在にでも満足して、相応に面白がつて行けるやうに、ちやアんともう、消極的に、あきらめ的に、自分を拵へあげようとしてゐるんだ。勿論俺なんざア別段さう偉くならうとも思つてないんだから、氣は楽だね。まア、大学を出たら、銀行にでもはいつて、成るべくゆつくり月給をあげて貰つて、その代りあんまりこき使はないやうにして置いてくれりやア、それでも満足さ。黙つてゐたつて、そのうちうちでお嫁さんも貰つてくれるだらうしさ」

「然し、それがみんな本音なら、貴様もちよつとえらいが……」

「えらいか？ そいつア困つたな。いよ／＼えらいとなると、また俺の人生観が變つて来ることになるんだが、もうそいつア厄介だ」

「なアんと、悟りすましたやうな顔をしてゐるが、直公も、女にかけると、随分がつ／＼する方だぜ」

「あゝ、それアするね」

と、心から同感したやうに、友達の方を顧みて、「殊にこつちに来てからがひでえんだ。俺ア、自分でも、こんなに燃えていゝか知らんと思つてるよ。……實際ひでえからなア」

「そんなに殺氣だつてるのか」

「さうたう殺氣だつてるね。だけど、大丈夫だよ。俺にア、当分、とても殺意なんぞ起りさうもないから」

こんなことを話しながら、二人は海岸へ出て、ぶら／＼江ノ島の方へ歩いて行つた。永い盛りの薄暮も、さすがにもう夜の闇に席を譲つて、空には星がきらめきそめた。彼等は砂の上に腰をおろして、暫くぼんやりと海を眺めてゐた。遠くから、白いゆかたの二人づれが近づいて来た。時煙草の火がパツ／＼と赤くなつた。近づいてみると、それは、片瀬の、学習院の游泳部の方に来てゐる中学生だつた。

「オイ、こら／＼」

悦三がつくり声でさう言つた。二人は慌てて煙草をうしろに隠したが、こつちをすかして見て、

「なアんだ、川瀬さんか」

「いま貴方のとこへ出かけて来たんですよ」

と、二人が殆ど同時に言つた。

「こゝはもう散歩区域のそとだよ」

悦三は、わざと先輩ぶつて、「それに、煙草なんぞ喫ん

で、けしからんな」

「庄司さん」

それには返事もせずに、柳といふとぼけた顔つきの少年が、直衛のそばへ寄つて来て、「なんか御馳走してくださいな」

「君たちこそ、片瀬饅頭でも、お土産に持つて来るがいんだ」

「あゝ、今度来るとき持つて来ます」

美少年の安井が、狡猾さうに、ぬからずさう答へた。悦三は、以前この少年に恋してゐたことがあつた。夢中で焦れてゐた頃にはどうにもならなくて、もう要もない今になつて、かういふ機会が来ることを可笑しく思つたりしながら、

「御馳走してやるから、言ふことをきくか」

「なに言つてるんだい」

もうその安井が薄黒く見えるほど鼻の下に生毛を延ばして、いつぱしちごさんでも拵へてゐる年ごろになつてゐた。

宿へ歸つて、自宅から送つて貰つた果物の罐詰などを一緒に食べて、暫く話すうち、二人は門限があるとして慌てて歸り支度をした。それを送つて、もう一度浜へ出ると、旧暦五日か六日ぐらゐの月が、海の上の沖天にかゝり、海軟風が涼しく頬を撫でて流れた。

ふと、並んで歩いてゐた安井の手が、直衛の指先にふれ、

そのまゝキュウツと握られた。と、殆ど同時に、

「明日、游泳に来るの？」

と、まるで、手と口とが別の持主に属してゐるやうに、美少年が平氣な顔で尋ねた。

女では勿論のこと、男でも、年下のものから、さういふ風にしむけられた経験のまるでない直衛は、我ながら情ないほどに心が騒がれて、すぐにはどういふ感情も浮びあがつては来なかつたが、その、人を食つた口の利きやうで、たちまち不快にされて了つた。

「どうするかわからない」

江ノ島葉山間の遠泳で、学習院の游泳部で試みた最初の年に先頭を勤めたほどで、直衛は得業生のなかでも、——殊に飛び込みや浮身や潜りなどの業事にかけては、先輩たちをも圧するほどの技術をもつてゐたので、学校をすませて了つた今年からは、ほんの包み金ではあるが、兎に角報酬をとる游泳部助手として、本来なら毎日片瀬へ出勤しなければならぬ身の上だつた。初めのうちは、悦三もおつきあひなり、大勢の友達に遇へる楽しみもあつて、一緒に出かけてゐたが、こゝからは可なりの道のりを、海岸づたひに歩いて行くのが億劫になつて、だん／＼に、「まあ、今日は怠けろよ」などと誘惑した。さうされ／＼は、直衛も、たつて一人でも行かなければならないといふほどに義務づけられてゐるわけでもないで、自然と怠けがちになつて来た。——それにしても、この場合の、「どうするか